

# 解説

附属幼稚園 3歳児

タイトル：「家庭から幼稚園へ 暮らしをつなげる～かくれんぼをして遊び出す子どもたちの姿から～」

授業者：灰谷知子・田村郁・黒瀬愛佳

解説タイトル：

## 幼児期におけるエージェンシーの萌芽

コンピテンシー育成開発研究所  
特任講師 Claudia Gherghel

本事例は、3歳児が家庭から幼稚園へと移行する朝の時間において、保護者との別れをどのように受け止め、自ら遊びへと向かっていくかを描いている。一見すると日常的な出来事であるが、その過程には幼児期におけるエージェンシーの萌芽が読みとれる。

**エージェンシー**とは、自らの意思で目標を見出し、状況に働きかけながら行動を選択し、その結果に責任をもって関わろうとする力である。それは自分の行為が環境や他者との関係の中で意味をもつことを実感しながら、主体的に関与していく力を指す。本事例において、A児は不安を抱えながらも玄関まで保護者を見送りに行くという行動を自ら選択している。この選択は、保護者と離れるという状況を受け身で耐えるのではなく、自分なりの形で向き合おうとする姿である。また、教師がソファを移動させ、子どもたちが横並びで座れる環境を整えたことにより、A児の行為は仲間との共有経験へと広がった。子どもたちは「いってらっしゃい」と声をかけながら、別れの時間を自ら意味づけていく。ここには、自分たちなりの行為によってその場を構成し直そうとする働きがみられる。

さらに象徴的なのが、B児の「隠れる」という行為である。保護者の姿が見えなくなるという出来事を受けて、自らの身体を「見えなくする」遊びへと転換していく姿は、感情の揺れを遊びとして再構成する創造的な働きである。同時に、みつけてもらうことを期待しながら隠れる行為には、他者との関係性を前提とした主体的な行動選択が含まれている。教師がその思いを受け取り「みつけた」と応答することで、子どもは自らの行為が意味をもつ経験を重ねる。やがて他の子どもたちも同様に隠れ始め、かくれんぼのような遊びへと発展していく過程は、子どもたち自身が別れの時間を遊びへとつなぎ直している姿である。

幼児期におけるエージェンシーは、目標を設定して達成するといった明確な形で表れるとは限らない。しかし、本事例にみられるように、不安な状況を自分なりの行為へと転換し、仲間や教師と関係を結び直しながら遊びを創り出していく姿は、主体として環境に働きかける力の萌芽であるといえる。家庭から幼稚園への移行という日常の一場面において、子どもたちは自らの暮らしを編み直しながら、エージェンシーの基盤を育んでいる。